

「二人の王」井上隆晶牧師

エレミヤ 31 章 10～17 節、マタイによる福音書 2 章 13～15、19～23 節

①【新しい出エジプト】 新年、明けましておめでとうございます。今年も主が皆様の歩みをお守りくださり、信仰の実り多い年となりますように祈ります。今日は二人の王という題でお話をします。二人の王とはイエス様という天の王と、ヘロデという地上の王です。イエス様が生まれるとすぐにヘロデ王はイエス様を殺そうとします。天使は夢でヨセフに告げます。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」（マタイ 2：13）そこでヨセフは起き上がり、夜のうちに二人を連れてエジプトに避難しました。この出来事は「主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。」（15 節）とマタイは書いています。この預言とは旧約聖書ホセア書 11：1 にある「エジプトから彼を呼び出し、わが子にした。」という言葉です。

ユダヤ教の教師たちの間ではメシアはモーセと似た運命をたどると信じられていました。ヘロデが二歳以下の男子を皆殺しにしたことも、エジプトのファラオが「生まれた男の子は一人残らずナイル川にほうりこめ」（出エジプト 1：22）と命じた事に似ています。エジプトに避難中のヨセフに天使が「この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった」（マタイ 2：20）といった言葉も、ミディアンに避難していたモーセに主が「さあ、エジプトに帰るがよい、あなたの命をねらっていた者は皆、死んでしまった」（出エジプト 4：19）と良く似ています。マタイの福音書はユダヤ人に向けて書かれているので、モーセの生涯とイエス様の生涯を重ねて語られているのです。モーセはイスラエルの民に「あなたの神は…わたしのような指導者を立てられる」（申命記 18：15）と預言しましたが、その預言者こそイエス様であるとマタイは宣言しているのです。

ですからこの物語はイエス様による「新しい出エジプト」なのです。アダムの不従順の罪を、新しいアダムであるイエス様の従順によって取り除いたという考え方は、2 世紀の初代教父エイレナイオスの文献の中にたくさん出て来ます。「主は万物を再統合したとき、私たちの敵に対するあの戦いをも自分のものとして引き受け、自らのうちに再統合された。」このようにイスラエルの歴史を繰り返すことによって、古いイスラエルの不従順を回復しているのです。イエス様は人類を導く新しい指導者であり、イエス様と共に旅をするヨセフとマリアは新しいイスラエルなのです。聖書が繰り返し、出エジプト、出バビロンを語るのは、信仰生活とはイエス様と共に約束の地（神の国）に向かって「この世を出る旅」であることを教えているのです。だから私たちは去年より「神の国」をはっきりと目標に定めなければならず、この世を捨てる覚悟をしなければなりません。これは弟子たちが常に

語って来たことです。「世のことに関わっている人は、かかわりのない人のようにすべきです。この世の有様は過ぎ去るからです。」(I コリント 7:31)「この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。」(ガラテヤ 6:14)

②【起き上がり、信仰を守りなさい】

ヘロデの迫害物語は、芽生えた信仰を殺そうとする悪魔的な力が働いていることを教えようとしているのです。ヘロデは皆さんに今日も働きかけます。教会に行くのを止めさせようとし、聖書を読むことも、祈ることも止めさせようとします。そのままなら皆さんの信仰は死んでしまいます。しかしこの物語は同時に、イエスを、つまり信仰を必死に守ろうとした人がいたということも伝えています。ヨセフとその母マリアです。ヨセフはどうやってイエス様を守ったのでしょうか。ここには4回も「起き上がる」という言葉が出てきます。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げなさい」(13 節)、「ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り」(14 節)、「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい」(20 節)、「そこでヨセフは起きて…イスラエルの地へ帰って来た」(21 節)。ヨセフには夢のお告げに対する迷いは見られません。彼はお告げを聞くとすぐに行動します。「起きる」ということは信仰と復活を象徴し、「寝る」は死と怠惰と絶望を象徴しています。信仰を守るには、絶えず神の言葉を聞き続けなければなりません。今年も聖書朗読に励みましょう。

③【神は全地を支配し、悪をも支配されて用いられる】

父なる神様は、ご自分の独り子であるイエス様が迫害されても、すぐに手を下してヘロデを滅ぼすことをしませんでした。イエス様は殺されそうになって逃げ回っています。神はなぜ悪を速やかに滅ぼされないのでしょうか。

エレミヤ書にこのような文章が出て来ます。「わたしは大いなる力を振るい、腕を伸ばして大地を造り、また地上に人と動物を造って、私の目に正しいと思われる者に与える。これらの国を、すべてわたしの僕バビロンの王ネブカドネツアルの手に与え、野の獣までも彼に与えて仕えさせる。…しかし彼の国にも終わりの時が来れば、…彼を奴隷とするだろう。」(エレミヤ 27:6~7) 神はイスラエルを滅ぼすバビロン王を「わたしの僕」と言われました。バビロン王も神の道具であり、神の支配下におり、試練を与えることを神が許可しているのです。同じように、この世の悪い王たちも神の支配下にあり、神の僕に過ぎません。彼らは役目が終われば、自ら行った悪によって裁かれるのです。

●榎本保郎牧師はこう言っています。「悪人が神によって造られたものであることを信じないと、悪に対して恐れを持つ。しかしどんなに私たちを苦しめたり、痛めたり、私たちに向かってくる力があつたとしても、それが神によって造られたものであるなら、私たちは安心することができる。神の支配がそこにも及んでいるからである。ティーリッヒ

が『神はガンをも造られた』と書いている。…」 「人類の歴史は、演劇の舞台のようなものである。…彼らは脚本どおりに動いているのである。…誰がいったいこの歴史の脚本を書き、誰が演出しているのかということを考えなくてはならない。」「どうすれば氣力を失っている人々を力づけることができるか。少なくともそういう恐ろしさから自由になっている者でなくてはならない。…」

神が悪を滅ぼせば、すべての人を滅ぼさなければなりません。あなたの中にも悪があるからです。そこで神は悪の存在を赦し、悪を用いて善を生み出すことをされるのです。そうやって私たちの信仰を強くしようとされているのです。聖書をよく見て下さい。「ヘロデが死ぬまでそこにいた。」(15)、「ヘロデが死ぬと」(19)、「この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった」(20)、と繰り返し「死んだ、死んだ、死んだ」と書かれています。ヘロデは必ず死にます。神に敵対する悪は必ず滅びます。「主よ、あなたに敵対する者は、必ず、あなたに敵対する者は、必ず滅びます。」(詩編 92 : 10) と書かれています。神様はこれらの物語を通して、悪は自滅するから放っておきなさい。どんなに悪の力が強く見えても怖れることはないということを教えているのです。神が造らなかったもの、悪、死は必ず滅びます。神から出たものだけが最後まで残るのです。これから 33 年後、人々はキリストを十字架で殺し、墓に入れ、封印しましたが、三日目に復活してしまいました。何をしても無駄でした。この方に誰も勝てないのです。そのお方の不滅の命をあなたは持っているのです。敵は私に何もできません。だから恐れてはなりません。

●クリスマス・ツリーというフランス映画があります。ある日、息子のマルセルは不慮の事故に遭って放射能を浴び、医者から残り 6 ヶ月の命と宣告されます。父親のローランはすべての仕事を辞め、マルセルの好きな田園に退き、二人で一日一日精一杯生きようとします。クリスマス・イヴのことでした。父親が買い物から帰ってみると、飾られたクリスマス・ツリーの下でメルセルは息絶えていました。傍らに「パパ、ありがとう。お幸せに！」と書置きがありました。父ローランは思い出をこう語りました。「僕は絶望した。たった半年のマルセルの命、そして医学は何も救えない。神に奇蹟を願ったら、奇蹟は起こらなかった。いや、奇蹟は起こったのだ。カレンダーを一枚一枚はぎながら、確実に一步一步死に近づくという体験を毎日新たにするのは、それこそ地獄だと思った。しかしそうではなかった。マルセルと僕にとってこの半年ほどすばらしい充実した人生はなかった。毎晩、二人とも信じられないほど安らかに感謝しながら眠れたのである。これが奇蹟でなくて何であろう。」

愛を感じられる日々こそ、本当に輝いて生きているのだと思います。

「悪」をこの世から無くそうと努力するよりも、自分と共にいるキリストの命と愛を絶対的に信頼する信仰を養うことです。悪があっても大丈夫、神の命、神の愛の方が強いと知ることです。あなたの中にキリストの愛と命が満ちますように。